マリンレスキュー ジャーナル

Vol 107 No2
2015 | 8月号

CONTENTS

01 MRJグラビア
平成27年度名誉総裁表彰式典

06 連載　マリンレスキュー紀行
海の安全安心を支えるボランティアたちの群像
京都府水難救済会　マリンレスキュー網野救難所／丹後町救難所

12 全国地方救難所のお膝元訪問
ニッポン港グルメ食遊記【丹後町救難所】

13 「青い羽根募金2015」活動レポート
平成27年度青い羽根募金強調運動／青い羽根募金強調運動期間における広報・周知活動／
青い羽根募金支援自動販売機の設置／平成26年度青い羽根募金の実績／
釣り専門チャンネル「釣りビジョン」の番組で、青い羽根募金への呼びかけ

17 水難救済思想の普及活動レポート

21 マリンレスキューレポート
Part1 救難所NEWS　海難救助訓練ほか／水難救助等活動報告
Part2 洋上救急NEWS　洋上救急活動報告／洋上救急慣熟訓練

31 レスキュー41～地方水難救済会の現状（シリーズ②）
特定非営利活動法人 秋田県水難救済会／石川県西部水難救済会

35 新設救難所の紹介

39 MRJ　互助会通信

41 MRJ　フォーラム
（公社）日本水難救済会の通常理事会、定時社員総会など開催／
平成27年度「海の日」大臣表彰及び長官表彰が贈呈されました
投稿：福岡県水難救済会創立90周年に寄せて（公益社団法人福岡県水難救済会）／
香川県との「災害時における船舶による輸送等に関する協定書」締結式について（香川県水難救済会）／
『救命胴衣の常時着用』『自分で守ろう大事な命』を呼び掛けるとともに【世界記録に挑戦!】（岡山県水難救済会）

46 編集後記

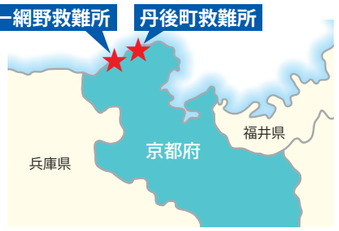
表紙：京都府水難救済会　丹後町救難所

連載 | マリンレスキュー紀行

海の安全安心を支えるボランティアたちの群像

京都府水難救済会　マリンレスキュー網野救難所／丹後町救難所

▲後ヶ浜に佇む「間人皇后・聖徳太子母子像」（右）と麻呂子親王の鬼退治伝説のある立岩（左）



美しき海岸線と地域を愛する、海とともに生きる男たちの覚悟

取材協力：マリンレスキュー網野救難所、丹後町救難所

“海の京都”の沿岸海域を守る自負

“海の京都”と呼ばれる京都府北部には、神話の創世物語や数多くの伝説が残る。天橋立の「国生み伝説」「龍神伝説」、京丹後・網野と舟屋の里・伊根の2カ所に残る「浦島太郎伝説」、丹後の歴史を彩る七人の美しい姫たちの「丹後七姫伝説」。さらには、風光明媚な舞鶴湾をつくった神の「枯木浦（かれきがうら）伝説」など、神話から歴史上の実在人物まで、あまたの神秘がそこかしこの山海に息づいている。

そんな悠久のロマンに思いを馳せると、「日本はここから始まった」という観光キャッチフレーズもうなづける。それは、神話や伝説の中に、約2000万年前に日本海が形成される物語が刻まれた太古の記憶を持つこの地で育まれた、日本の文化の源流を感じとれるからかもしれない。そこには、海を越えて大陸から伝わった文化と、日本古来の文化の2つが混ざり合った、現在の日本に通じる歴史や人々の営みが見えてくる。

さまざまを受け入れ、呑み込んできた懐深い碧さを湛える海の京都の日本海、世界ジオパーク認定の美しき海岸線上に、今回、取材に訪れた救難所がある。2004年、周辺の6町が合併し、誕生した京都府最北部のまち・京丹後市。漁業従事者はもちろん、海水浴客や釣り人も多いというこの地で海の安全を守っているのが、京都府水難救済会だ。西から久美浜、マリンレスキュー網野、丹後町、宮津・与謝、舞鶴という5つの救難所が、海難事故や洋上救急などの活動を続けている。

美しき自然と自分の地域を愛しながら、大らかさと厳しさを併せ持つ海に生きる男たちの覚悟を聞いた。

マリンレスキュー網野救難所

▲浅茂川漁港に流れ込む福田川に架かるひよしばしにて。すぐ後ろに漁船が停泊し、海へと続く（左から野村和己さん、宮下忠司さん、東宣行さん、吉岡要三さん、西岡勝彦さん、石川賢治さん（京都府水難救済会事務局長））

“海の京都”に生きる男たち

JR京都駅から特急はしだてに乗って約2時間。日本三景の一つ「天橋立」に程近い天橋立駅から京都丹後鉄道に乗り換えて約30分、着いた駅が網野だ。海へ向かって、車で約10分走ると浅茂川漁港に出る。日本海に注ぐ福田川の河口にマリンレスキュー網野救難所がある。

ここは、同救難所の東宣行所長の自宅でもあるという。かつて、この場所で民宿を営んでいた東所長は、25歳の時からボランティアで水難救済活動を行ってきた。「観光業者の仲間うちでやっていました。というより、やらざるを得なかったね」と、笑うが、その歳月は実に40年も及ぶ。副所長を務める吉岡要三さんも「お宿梅屋」の主人として、宿泊客や観光客が困ったことがあれば、いつでもボートを出してきた。組織のかたちではなかったが、海のそばで暮らし、海の恵みで生活しているのなら、当たり前のことだと思っていた。

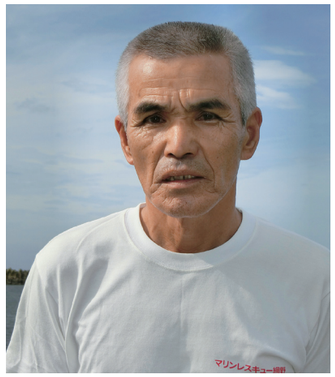
「でも、一人は一人の力でしかない。仲間がいれば、それだけ大きな力になる。そして、地域の力にもなるはず」だと、東所長はマリンレスキュー網野を立ち上げ、京都府水難救済会が発足した平成11年、日本水難救済会に加盟した。当初は、船舶所有者、サーファー、磯釣りの人たちなど、合わせて110名を集めた。

▲「梅ちゃん」こと、副所長の吉岡要三さん

美しさと怖さを併せ持つ海との共存

日本海側の海岸線は西から久美浜、八丁浜、掛津、琴引浜……と、海水浴場や名所が続くが、同救難所の担当は八丁浜と掛津。海水浴客や釣り客が多い土地柄だけに、特に夏場の水難事故が多い。全国の海水浴場と同様、沖方向へ強く流れる“離岸流”の発生がその引き金になることが多い。

「京阪神から来て、海水浴をして、夜、お酒を飲んで海に入り、そのまま離岸流に流される人を何人も見てきた」と、吉岡副所長が口火を切ると、「都会から来なるお客さんはちょっと無謀やな」と、宮下忠司さんも続けた。また、夏に山から海へ向かって吹く南風（みなみ）も侮れない。強く吹くと、煽られて海水浴客が沖へ流されてしまうこともある。“嵐”とも呼ばれるほどで、浜辺では穏やかでも、岩陰も小島もない沖へ出ると、文字どおり嵐のように荒れるという。「漁師なら、南風が吹けば沖には出んが、素人さんは海の怖さを知らん」（宮下さん）。「南風というと優しい感じだが、嵐といえば怖い。だから、昔から漁師たちは『南風には気を付けんさいよ』という意味を込めて、そう呼んできたのだろう」と、東所長も先人の警告には心しているという。



▲男気あふれる東宣行所長

目の前で目撃した小型飛行機墜落事故

そんな東所長が長年のレスキュー活動で大きな記憶として挙げたのが、平成15年5月4日に起きた小型飛行機墜落事故だ。記録によると、午前11時40分頃、八丁浜の沖約2.5kmの日本海に飛行機が落下したとある。ちょうど、その時間、八丁浜沖に出ていた東所長は、その光景を目にしていた。まるで、水鳥が水の中に飛び込むように水しぶきが上がったという。驚いて、現場と思われる場所へ急行したが影も形もない。浮遊物も何ひとつない。その後、他の所員にも連絡し、連日、必死になって捜索した結果、5㎝ほどのゴムの破片を見つけた。海上保安部に調べてもらったところ、間違いなく同機の部品だと判明。海上保安庁の水中探査機や海上自衛隊のダイバーなどが出動し、水深43m地点で機体を発見したという。墜落から発見、機体・遺体の引き揚げまで1週間を要した大事故だった。

水難救済活動をとおして、先人とつながる

「この写真を見てほしい」と、東所長から手渡された1枚のモノクローム写真。何かの記念写真のようだが、ところどころに笑顔が見られる。聞けば、戦後間もない昭和21年頃のもので、マリンレスキュー網野救難所を結成した後、近所の人が「ここにお前たちの旗が写っとるぞ」と、写真を持ってきてくれたという。

▲戦後すぐ、この地にあったと思われる水難救済会の前身のメンバーが写っている

▲水難救済会の旗がはためく東栄丸

「そこに翻っているのは、間違いなく日本水難救済会の会旗でした」。東所長はまぶしそうに、懐かしそうに写真を見つめる。前列に座る漁師、後列に立つ制服姿の警察官か海上保安部の役人らしき人物に加え、町長や底引き網船の船長らとともに、半分くらい見える“浮輪”の記章の会旗がその証だ。「僕の生まれる前の話で、水難救済所の前身があったなんて全然知らずに立ち上げたが、この写真を見た時、運命のようなものを感じました」と、東所長は振り返る。ここ浅茂川地区に先人から脈々と受け継がれてきた水難救済への思いにふれた瞬間だった。

昔を知る人に聞くと、彼らは、海での遭難者はもちろん、終戦直後の治安が不安定な時代、襲われた船や機雷にふれて爆発した船の救助にも自分たちの救助船で駆けつけていたという。そんな物騒なことが頻繁に起こっていたため、「有志で救助隊を結成したのではないか」と、東所長は想像する。「もちろん、昔から水辺の救援活動をする組織は他にもあっただろうが、金比羅さんから遠く離れた日本海側にもあったなんて思いもしなかった」。それは、水難救済活動に携わる者として、嬉しい発見だった。

▲漁師歴18年の宮下忠司さん

官・民5機関で合同水難事故救助訓練を実施

今年6月22日、八丁浜に隣接する小浜(こばま)海水浴場で舞鶴海上保安部、京丹後警察署、京丹後市消防本部、京丹後市、そして、マリンレスキュー網野救難所の官・民5機関による合同の水難事故救助訓練が行われた。参加者は総勢72名で、同救難所からは32人・22隻の船舶を出した。訓練は、この浜でも実際にある離岸流が発生し、遊泳者が流されたという想定で実施。同救難所員らは関係機関との連携を確認しながら、状況に応じた救助の動きについて考えながら行動したという。

この日の訓練は、同救難所と、西隣にある久美浜救難所が1年おきに舞鶴海上保安部と同市消防本部と合同で実施してきた訓練に、今回初めて京丹後警察署と京丹後市が参加したもの。「日本の中でも、官民一体でこれだけの機関が一緒に水上の安全と水難救助のために訓練するというのはそうそうあることではないと思う。だからこそ、大きな意味がある。それがわれわれの自負です」。東所長の自信に満ちた言葉に、全員が頷いた。

▲去年、漁師になったばかりの野村和巳さん

助け合う地域風土、お互いさまの心

「ありがたいことに、平日の訓練でも32人が自分の体と時間とガソリン代を使って参加してくれた。ましてや、事故が起こった時は協力して駆けつけてくれる。皆、素晴らしいメンバー」。東所長はメンバーへの感謝の気持ちを表すことを忘れない。「人の命を助けるために、自分の危険を顧みずに行動する。それは、助け合いや協力し合うという地域風土の中に育ってきているからでしょう」。

「実は、俺も日本海を漂流3回やっている…。走行中、気付かないうちに船外機が海に落ちていて、別の船に曳航してもらって戻ってきたこともある」と、吉岡副所長が話し始めた。「自分が曳く側の時は、無事に戻してやらにゃいかんという気持ちばかりだが、曳かれる側になる時は恥ずかしいし、バツが悪い。それでも、仲間内で助け、助けられ、お互いさまという気持ちがあるので、出動要請があった時はまず駆けつけようという気持ちになります」。

▲この地に伝説が残る浦島太郎の像。嶋児神社に佇む

▲松葉ガニの底曳網漁船の漁師・西岡勝彦さん

夏の出動を見据えた態勢づくり

平成25年12月26日に起きた、ハマチ漁場ポイントでの漁船衝突事故には、現場にいた所員・本井辰直さんと出動した東所長が海難救助に当たった。付近を航行する船舶に対し、周知や漂流する船舶の監視を行い、二次災害を防止に努めながら、海中転落者を救助した功績を認められ、二人は表彰を受けた。

大勢の海水浴客がやって来る暑い夏を迎え、マリンレスキュー網野救難所では、いつもにも増して迅速に出動できる態勢を整えているという。現在、所属は51名、そこには東所長の強力なリーダシップがある。

▲昨年、港の拡張工事が行われたばかりの間人港

聖徳太子の御母から賜った御名が地名に

約20Km離れた間人(たいざ)へは、浅茂川漁港から車で20分余りのドライブだ。「山陰海岸ジオパーク」に認定されている日本海の海岸線は息を呑むほどに美しい。

丹後町救難所がある京丹後市丹後町間人は、聖徳太子の御母・穴穂部間人(あなほべのはしうど)皇后が、曽我氏と物部氏の騒乱を避け、身を寄せた地と伝わる。大和国へ帰られるにあたって、皇后から御名を賜ったが、その高貴な名を口にするのは畏多いと考えた村人たちは、御退座にちなんで「たいざ」と読むことにしたという。そんな伝説を彷彿とさせる間人皇后と幼い聖徳太子の母子像が日本海を眺めるように佇む後ヶ浜(のちがはま)の風景は、間人の伝説と現在をつなぐシンボリックな風景である。

▲所員のまとめ役、寺田直彦所長

▲漁師歴50年、観光ガイドにも定評のある戸石博雄さん

後ヶ浜に隣接する間人漁港に58名から成る丹後町救難所がある。西から、間人、竹野(たかの)、中浜という3つの漁港を拠点とする漁師たちが、さまざまな水難救助の最前線として海の安全を守っている。今回、集まってくれたのは竹野の所員5人。主に、船上から箱メガネで海底を覗きながらサザエやアワビなどを採捕する水視(すいし)という採貝藻漁業や小型定置網漁業に携わっているという。

釣りの名所に潜む水難事故

“間人ガニ”が水揚げされる港として有名な間人漁港周辺には、釣り人に人気のスポットが点在する。そのため、釣り人が絡む水難事故も少なくないのが現状だ。

昨年、丹後町救難所の出動は4回あったが、竹野のメンバーが関わった事案も、釣り人の転落死亡事故だった。昨年11月23日、後ヶ浜にある立岩(たていわ)に釣りに行った人が行方不明に。その日は発見できず、翌24日にも続けられる捜索への参加要請が、京丹後市職員から寺田直彦所長のもとへ入った。

名勝・立岩は釣り場としても有名で、この遭難者も京阪神から来ていたという。出動要請があると、

▲地元のことをいろいろ教えてくれた尾瀬登さん

▲丹後救難所・竹野のリーダー的存在
西口敏明さん

通常、寺田所長は事故現場に最も近い地区へ連絡を入れるが、立岩は間人と竹野の中間にあたるため、双方に連絡を入れた。先に連絡がとれた間人から2名と、竹野から東清信さんの3名3隻が出動。朝8時半からの捜索の結果、24日の10時20分頃、海底に沈んだ行方不明者を発見した、痛ましい事故だった。

周囲1km、高さ20mの柱状節理の安山岩で、荒々しい直線的な岩肌が特徴的な立岩。クロダイ、スズキなどが釣れる釣りのメッカであるがゆえに、「事故もそれなりにある」と説明してくれたのは、水視漁歴55年の尾瀬登さんだ。「あそこは清水と海水が混ざる場所やけん、水温差があって心臓麻痺なんかが多いんじゃ」。海面は海水で比較的温かいが、1mも沈むと水温がガクッと下がるという。

また、「この辺では『弁当忘れても、傘忘れるな』と言われてきたし、風が吹いたり、やんだりすることを指す“ウラ西”という言葉もある」。尾瀬さんの話は、この地がいかに天気や風の変化が激しいかを物語っている。

▲漁師歴9年目の西口正俊さん

▲竹野地区で最高齢の漁師・西田敏雄さん

自分の感覚を信じて判断する

数年前、水難救助の出動経験があるという戸石博雄さんは、海水浴客が流された際、竹野の西口敏明さんと、間人の船2隻とともに海へ出た。結局、行方不明者は翌日に見つかり、既に亡くなっていた。

「海難に遭遇したら放っておくわけにはいかん。自分がいつそういう目に遭うかもしれんという心がけはしている」。竹野で最も出動が多い西口さんは、穏やかな笑顔ながらきっぱりと言い切った。「印象に残っていることは?」という質問にも、「全部だよ。どんな出動も忘れられることではない。遺体を引き揚げた生々しさも含めて、すべて大変だった」と。海に生きる覚悟が垣間見えた。

そんな西口さんが肝に銘じているのは、「心臓がドキドキっとした時は漁に出ちゃいかんということ」だ。波や風、体調など、自分の感覚で自信がない時は出漁するなと、自らにも息子の正俊さんにも言い聞かせている。

▲丹後町救難所の職員・松岡敏幸さん

海が授けてくれた地域の宝を次世代へ

西口さんの息子・正俊さんは漁師歴9年目の地域の期待の星だ。父の背中を見て、漁師になることを決意したという。しかし、仲間に同世代の後継者はいない。先細る地域産業の行く末を考えていた時、父・西口さんは足元に宝を見つけた。

4年前、イタリアのカプリ島にある有名な「青の洞窟」に匹敵するような洞窟を発見したのだ。昔から漁師は出入りしていた場所だが、そこに価値を見出し、最初に紹介したのが西口さんだという。洞窟は「京丹後・青の洞窟」と、入口のハート形マークにちなんで「愛の洞窟」と名付けた2つがある。これらを観光資源にし、地域を活性化しようという動きは、西口さんら漁師が小型船ガイドを行うなど、年々活発化している。

定置網漁を続けて45年の西口さんは言う。「観光客を呼ぶということは、ますます安全第一でいかにゃならん。今後も気を引き締めて水難救済や事故防止に努めていきたい」と。

全国地方救難所のお膝元訪問

ニッポン港グルメ食遊記

冬は名物「間人ガニ」を食べに来る観光客で賑わう間人だが、夏は夏で活きのいい日本海の幸が水揚げされるという。
今回は、丹後町救難所・寺田直彦所長のおすすめの宿「うまし宿とト屋」で“贅沢なランチ”をいただいた。

日本海の海の幸　刺身の盛り合わせ

うまし宿 とト屋（京都府京丹後市）

名勝・立岩のある後ヶ浜海岸からすぐの場所にある「とト屋」。客室は10室という小さな宿だが、地域のリーダー的存在である女将の池田香代子さんが次々と企画するプランは、宿泊客を120%満足させると、評判だ。

例えば、宿泊客に「間人ならではの体験をしてもらいたい」と考えた「丹後マイスターツーリズム」。その一つが、丹後町救難所の所員で漁師の西口敏明さんと一緒に、日の出とともに漁に出る「朝日を見ながら定置網体験 トレビチ魚を食す!」だ。間近で本業の漁を体験するは人気のツアーだという。

その西口さんの漁で獲れた魚を刺身にして盛り合わせた「特製ランチ」は、思わず声を上げてしまいそうなくらいのボリューム感。それに、何といっても、切り身の透き通ったような美しさ。獲れたての新鮮さゆえだが、あまりにも感動して、感嘆の声を上げる。

この日、大皿に盛り合わされていたのは、真鯛、石鯛、ハマチ、イサキ、シロイカ、ヒラメなどなど。季節、その日の漁や仕入れによって、魚の種類は当然変わるが、新鮮さとおいしさは折り紙付きである。

そのほかにも、サザエ、鯛の唐揚げ、アジの赤ちゃん・ジンタの佃煮、酢のもの、もずく、鯛めしなど、地のものが並んだ。ちょっとユニークなのが「鯛入りカレー」。さっぱりとした味は、和風カレーといってもいいくらいだ。聞けば、カレースパイスと丹後産コシヒカリの米粉をあわせた「丹後こしひ加哩」を使ったカレーで、食用油脂を使っていないため、おなかに溜まる感じがないという。

通常はランチというかたちではやっていないというが、「なんでもご相談ください」と、女将。大らかな風貌は日本海の懐の深さに通じる。

京都府京丹後市丹後町間人566
TEL.0772−75−2639

▲間人の海の幸がずらり。
鯛入りカレー（左）もおいしい

女将の池田香代子さん。▶
毎朝、魚を市場へ
仕入れに行くという

▲獲れたての
真鯛、石鯛、
ハマチなど

▼すぐ裏手は海。
趣のある宿だ